

氏 名	佐 藤 卓 也
授 与 し た 学 位	博 士
専 攻 分 野 の 名 称	医 学
学 位 授 与 番 号	博 甲第5474号
学 位 授 与 の 日 付	平成29年3月24日
学 位 授 与 の 要 件	医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学 位 論 文 題 目	Radiofrequency ablation of pulmonary metastases from sarcoma: single-center retrospective evaluation of 46 patients (肉腫の肺転移に対するラジオ波焼灼術: 単施設における46例に対する後方視的検討)
論 文 審 査 委 員	教授 三好新一郎 教授 尾崎敏文 教授 大藤剛宏

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

肉腫の患者の約半数が経過中に遠隔転移を生ずる。肺転移が最多で最も多い死因であり、肺転移の治療は重要である。我々は肉腫の肺転移に対し当院にてラジオ波焼灼術を行った46症例・144病変において、局所制御率、合併症、生存期間とそれに関連する要因を後方視的に検討した。局所再発は22/144腫瘍で見られ、一・二次制御率は1年で83.5%と90.0%、2年で76.3%と81.4%だった。National Cancer Institute Common Terminology Criteria for Adverse Events, Version 4.0にてgrade 3以上の重篤な合併症はなかった。観察期間中に生存していたのは28/46症例(60.9%)で、1,2,3年生存率は80.6%, 70.1%, 47.1%であった。単変量解析では肺外転移の存在( $p=0.005$ )、焼灼術時の残存病変の存在( $p=0.009$ )、焼灼後の無病生存期間が12ヶ月以下( $p=0.015$ )が有意な予後不良因子だった。肉腫の肺転移に対するラジオ波焼灼術は良好な局所制御が得られ安全であり、有効な治療選択肢と考えられる。

### 論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は、肉腫の肺転移症例に対して RFA を行った 46 症例・144 病変において局所制御率、合併症、生存率、生存に関連する要因を後方視的に検討したものである。その結果、一・二次局所制御率は 1 年で 83.5% と 90.0%、2 年で 76.3% と 81.4% であった。National Cancer Institute Common Terminology Criteria for Adverse Events にて grade3 以上の重篤な合併症はなかった。1,2,3 年生存率は 80.6%、70.1%、47.1% であった。単変量解析では肺外転移の存在、焼灼術時の残存病変の存在、焼灼術後の無病生存期間が 12 ヶ月以下、が有意 ( $P < 0.05$ ) な予後不良因子であった。これらの結果は、肉腫の肺転移症例に対して RFA が有効な治療法であることを証明したものであり、価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。